

HALE 理事を紹介します①坂井会長

ハワイで増える「新一世」ソニー現地法人社長が定年後に移住した理由

ハワイへの日系移民が始まったのは1868年。それから150年余り、今やこの島では日系6世が活躍しているが、最近では自らの意思で新たにハワイに移住した日本人たちも多い。彼らは「新一世」と呼ばれる。

今年で設立15年を迎える現地のNPO法人「ハワイアロハライフ協会」の会長を務める坂井諒三さんもその1人。坂井さんは、これまで筆者が出会った新一世のなかでも、かなりの「強運」の持ち主なのである。

坂井さんは1970年にソニーに入社、1985年に39歳でソニーハワイの社長として着任して以来この地に住み、会社初の海外赴任地で定年を迎えた人物となり、そのままハワイの住人となった。これは稀有なパターンだ。定年まで21年も海外法人の社長を務めたわけだから、現在の大手企業の人事システムではちょっと考えられないかもしれない。

さらに、ハワイに赴任する際には持ち前の強運を発揮する。当時のソニーの盛田昭夫会長は、ソニーハワイの社長候補として3人を選び、順番に電話をかけていった。1人目は電話がつながらず。そして2人目に電話をかけたのが、当時ロサンゼルスに駐在していた坂井さんだった。

なんと、坂井さんはその日、日本での会議に出るため空港に向かう予定だったが、息子さんが熱を出したために飛行機の時間を少しずらして自宅にいた。そこに盛田会長からの直電、無事に社長指名の電話を受けることができたのである。

携帯電話やEメールなどなかった時代ならではのエピソードだが、なんとという強運だろうか。ソニーハワイの社長に就任してからは、米軍の販売ルートを開拓して売上を10倍に伸ばしたり、米PGAゴルフトーナメントの「ソニーオープン・イン・ハワイ」をスタートさせたり、八面六臂の活躍。米軍の担当者相手にゴルフのパット対決で勝って販路を開拓したこともあったそうで、強運ぶりを遺憾なく発揮していった。

現在もハワイで開催されているPGA公式トーナメントである「ソニーオープン」を誘致する際には、その話し合いの席にマイケル・ジャクソンが同席して応援してくれたそうだ。何でもマイケルがハワイでコンサートを開いた際に、ソニーが全面的にバックアップしたことへの恩義を感じてのことだったそうだ。何ともスケールの大きな話。

実はこのソニーオープンがスタートした1999年当時からの坂井さんの念願の1つが「日本人の優勝選手を出すこと」だったそう。今年、見事に優勝を果たした松山英樹選手は、実はこの大会が始まって以来の悲願も実現していたことになる。

坂井さんはソニーを定年後、ハワイの実力者たちを巻き込んで前出のNPOハワイアロハライフ協会（設立時の名称は「ハワイシニアライフ協会」）を設立。ハワイと日本の架け橋として大きな影響を持つ団体に成長させ、現地の重鎮として、いまでも現役で活躍を続けている。ハワイアロハライフ協会は、現在約1000名の会員を抱え、現地のNPO法人としては唯一、日本在住の人たちとハワイ在住の人たち双方に会員を持つ組織となっている。

そんな坂井さんに言わせると、ハワイの最大の魅力は、いつも吹いている「爽やかな風」なのだそうだ。39歳の時に初めて降り立ったホノルル空港で感じたハワイの風の心地良さは、いまでも忘れられないと言う。

そして、坂井さんがいつも口にしているのが「グローバル・ローカライゼーション」という言葉。坂井さんをハワイに結びつけたソニーの盛田会長が語っていた言葉だそうだが、「考えることはグローバルに、でも行動は歯を食いしばってでもローカライズに」という意味で、それをソニーハワイでの社長時代も、現在のNPO代表になってからも、忘れずに実践しているそうだ。

坂井さんに会うとわかるのだが、とにかく明るい。どんな局面でも「あはは」と冗談を言いながら、周囲を明るく沸かせて、巻き込んでいく。この人の周りには、いつも人が集っている感じがある。そして、そんな人のところには、爽やかな風が強運を運んでくるのだろう。そう思わせる、新一世の1人である。（Forbes Japan 連載「観光目線からは見えないシン・ハワイ（岩瀬英介）」より転載）

（筆者プロフィール）

編集者／当協会広報委員長

早大法卒、小学館勤務を経て2009年ハワイ移住。

ライトハウス初代編集長を経て各種メディアを手掛ける。

